

F-1 明治以降における家政に関する教育の発達について (第1報-5)

東京家政学院大 家政 手塚六郎 中村ヨシ ○ 龜高京子 熊田知恵
板谷麗子 三東純子

目的 家政学の形成過程に焦点を置きながら、各時代の特性との関連において、家政に関する教育を総合的に考察し、ついで現代および将来における課題を探ろうとするのが私達の共通目的である。本報告は、明治初年から18年までの“教育を行う側と受ける側とのかかわりあい”について考察を試みた。

方法 第1報ノ一々をふまえて、官公庁発刊の教育史資料、学校史、教育史関係著書、家政教育に関する著書・論文および伝記などを資料として研究した。

結果 明治初期における欧米の啓蒙的女子教育思想は、その受け入れ可能な環境では花を開き、家政に関しても翻訳家政書を通して家政の理念や女性の生きかたに新しい方向づけの役割を投げた。しかし、大多数の庶民は学校教育の必要を認識するまでに到らず、学制条文中の立身出世主義的学問のすあめをもってしても女子の就学には結びつかなかったようである。

これらの社会状況や翻訳家政書の長所をとり入れたとみられる14年の小學校教則綱領に導かれた家政書は、家政教育の普及と女児就学の諸因になったとみられる。このことはまた、後年の学校における女子教育に実学重視の傾向を与える一因になったものと考えられる。